

デスポッチャ（デスポーザブル・ボッチャ）に関する実践研究

杉中拓央* ・ 藤川雅人**

Takuo SUGINAKA ・ Masahito FUJIKAWA
Practical Research on Disposable Boccia

ABSTRACT

本研究は、ボッチャを身近なりサイクル素材（古新聞、段ボール）を用いて手作りし、使い捨て可能（デスポーザブル）な形で実践する「デスポッチャ」を開発・導入した実践研究である。教員養成課程の学生を対象に、90分の授業内で用具作成からゲーム、振り返りまでを実施した。感染症対策、大人数での実施可能性、教材準備の難しさといった課題に対応しつつ、障害理解教育、インクルーシブな視点の涵養、遊びや授業のアイデア創出を目的とした。実践後のアンケート調査では、「楽しさ」「教育・保育現場での活用可能性」「紙での代用可能性」などの項目で肯定的な評価が得られた。自由記述からは、用具の不均一性から生まれる楽しさ、活動の経済性・簡便性、インクルーシブ教育への示唆、教材開発への刺激といった多様な学びや気づきを確認された。実践の結果からは、アダプテッド・スポーツの理念を手軽に体験し、学生の主体的な学びと教材研究への意欲を喚起する有効な教育手法となり得る可能性が示唆された。

【キーワード：ボッチャ、肢体不自由、自立活動、補助具・補助的手段、アダプテッド・スポーツ】

1. はじめに

ボッチャは、四肢や体幹に重度の機能障害を有する脳性麻痺者が参加できるようヨーロッパで考案されたパラリンピックの正式競技（片岡・奥田，2016）である。障害の有無や年齢、性別を問わず、場の設定や用具、ルールの工夫により、多くの人々が楽しめる。ボッチャはアダプテッド・スポーツの一つでもある（細谷・五十嵐・三瓶・齋藤・村岡，2024）。アダプテッド・スポーツとは、用具やルールを実践者にadapt（適合）させることによって、誰でも楽しむことができるよう工夫されたスポーツのことである（大山，2017）。また、ボッチャはパラスポーツの代表的なものの一つでもある。パラスポーツとは、国際パラリンピック委員会公認教材（公益財団法人日本パラリンピック協会，2025）によれば、パラリンピックの競技種目であるなしにかかわらず、障害を有するアスリートが行うスポーツ全般の総称であると示されている。

学校教育現場におけるボッチャに関する研究は様々な学校種で積み重ねられている。中安（2022）は、小学校の体育にパラスポーツを取り入れることで、児童が生き生きと授業に参加し、技能差や性差を超えた交流が促進された事例を報告している。富岡（2021）は、小学校の体育においてボッチャを教材として取り入れた学習成果について、児童が運動の楽しさを味わっていたとし、さらに学校から離れた場での遊びにも取り入れるなど、学外の生活との結び付きがあることもボッチャを教材とし

た効果であると報告している。なお、富岡（2021）は、ボッチャのボールは高価であり、購入することが難しいことから、幼児用のボールプールに使用するボールに穴をあけ、砂を注入したボールを製作して、それを教材としている。牛島・高山・原・中山・納富（2023）は、小・中学校において、パラスポーツ体験の一つとしてボッチャを選定して取り組んだところ、児童生徒はユニバーサルスポーツの特徴であるルールや場の工夫に気付いたという報告をしている。齋藤・澤江・齋藤・松原（2022）の研究では、中学生がボッチャを体験することで、障害や障害のある者のスポーツに対するイメージがポジティブに変化し、特に、実際に競技を体験することがスポーツとしての楽しさへの気づきにつながったことを指摘している。上記のように、ボッチャの体験には児童生徒の障害に対する肯定的な意識変容を促す効果が報告されている。

また、特別支援学校においても研究が蓄積されており、栗生田・押木・鈴木（2012）は、特別支援学校高等部において体育の授業にボッチャを取り入れ、ボッチャを実施した効果を検討するために、アンケート調査を行った結果、生徒はこれまで他者と競う経験が少なく、「試合」をどのように進めるか思考する過程を体感し、「他者との関係」において、自分の意志を伝えるために生徒が自発的に関係性を強めたものと考えられるとし、生徒の自立行動の変容が示唆されたと報告している。洞井・藤田・金森（2021）は、特別支援学校で作成したボッチャの指

* 東北文教大学人間科学部子ども教育学科

** 島根大学教育学部特別支援教育専攻

導段階表の授業内容と地域の競技団体の練習内容を比較し、指導段階表に練習内容を取り入れることが可能な内容について検討した研究を行っている。そして、特別支援学校の授業に地域の競技団体の練習内容を取り入れることで、卒業後も同じ技術の基盤に立った練習が可能となり、生涯スポーツの実践に向けたスポーツキャリアの形成が可能になる（洞井・藤田・金森, 2021）と報告している。その他、本多・橋本・太田・大原・岡・住岡・丹沢・村山・大内田・岩井（2022）による身体運動の不器用さと知的障害を併せ有する高等部の生徒を対象とした、ボッチャの投球動作の習得を検討した研究も行われている。

また、ボッチャを通じた交流及び共同学習に関する実践も報告されている。森・佐藤（2020）は、特別支援学級担任と児童が主体となり、通常の学級の児童を特別支援学級の活動に「招く形態」でのボッチャを題材とした授業を展開したところ、担任や児童へのアンケート、作文やインタビュー及び映像記録を通して分析した結果、双方の児童に大きな変容が見られ、また担任も負担感少なく取り組むことができたことを報告している。細谷・五十嵐・三瓶・齋藤・村岡（2024）は、教育大学の附属特別支援学校小学部と附属幼稚園の学校間交流にアダプテッド・スポーツの一つであるボッチャを導入した実践に取り組み、小学部の児童は同じ活動グループの園児に対して、手本を示そうとする姿や活動に参加できるようにエスコートする姿が見られ、相手を思いやる姿の表れの一つと考えられるとの報告をしている。また、和田（2024）は、大学生と中学生のボッチャ交流会を実施したところ、ボッチャの面白さや他者との関わることのよさ等、ボッチャは効果的であり、スポーツ教育の実践モデルの有効性が確認できたと報告している。

大学教育においてもボッチャを導入した教育実践は取り組まれている。真砂・大木（2024）は、保育者養成の大学の授業においてボッチャの活動に取り組み、アンケートの結果において、「スポーツをすること自体の楽しさ」だけでなく、「仲間と一緒にスポーツをする楽しさ」を子どもたちにも伝えたいという回答が多かったことから、「アダプテッド・スポーツ」を体験することは、意義があると指摘している。加えて、「応援することの大切さ」や「個人差がでないような工夫」、「成功体験を与えたい」といった保育者としての視点で回答する学生も多かったことから、保育者養成の学生において効果がある（真砂・大木, 2024）と指摘している。

他方、大学の保育者・教員養成課程においてボッチャのようなパラスポーツを導入する際には、いくつかの課題が存在している。特に大人数の概論的な要素のある授業で実施する場合、公式用具の数を揃えることは経済的・物理的に困難を伴う。さらに、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行以降、ポストコロナの段階にあっても、大学等の教育機関では依然として感染対策が重視されており、用具の共有等が衛生面において懸念される場面も少なくない。

そこで本稿においては、用具をすべて紙材料で手作り

し、活動後は廃棄することを可能としたデイスポーザブル（Disposable）形式によるボッチャ、「デイスボッチャ」を試験的に考案し、演習において実践した過程について報告する。

2. 方法

2-1. 本実践の目的

本実践の主な目的は以下の通りである。

①アクセシビリティの確保：高価な専用用具を必要とせず、廉価で調達可能な素材（古新聞、段ボール等）によって用具を作成することで、準備を容易にする。

②感染対策への対応：用具を使い捨て可能にすることで、共有による感染リスクを低減する。

③教育的効果の追求：

障害理解：ボッチャの体験をととして、障害のある人の状況やパラスポーツの工夫について考え、共生社会の形成に向けた視点を持つ。また、パラスポーツやアダプテッド・スポーツの理念とも言える「個に合わせた調整」の重要性を理解する。

教材研究・実践力の育成：学生自らが用具を作成し、ルールを学び、実践するプロセスをととして、将来、教育・保育現場で応用可能な遊びや授業のアイデアを増やすことを目指す。特に、ルールや用具を工夫することの楽しさや重要性を体験的に学ぶことは、多様な子どもたちに対応できる実践力を養う上で重要である（佐藤, 2018）。

2-2. 対象

短期大学の幼稚園教諭養成課程に所属する2年生46名を対象とした。202x年～202x+1年にかけて、計3回の予備的实践を行ったのち、本論文の実践は202x+2年4月の授業において実施された。

2-3. 準備物

ボール製作用の古新聞（各班で見開き2～4枚程度×6人分+予備）と、紙のガムテープまたはカラーテープ（適量）、およびランプ製作用の段ボール（適量）、コート設営用の紐（適量）であった。

2-4. 実践の枠組み

本実践は、肢体不自由および病弱教育に関する概論を受講済の学生に対し、標準的な90分の授業時間内で完結するように設計された。

①班編成と用具作成（約20分）：学生5～8人を1班としてグルーピングを行い、6チームを編成した。各学生は、古新聞を見開き2～4枚程度（重さの好みで調整可）を球状に圧縮し、ガムテープでくるんで「マイボール」（黄・青）を1球ずつ作成するよう指示された（図1・2）。同時に、教員はゲームの基準点となる白のジャックボールと、投擲を補助するための簡易的な「ランプ（勾配具）」

を段ボールによって作成した（図3）。

②コート設営（約5分）：教員と学生が協力し、大学構内の芝生において、ボッチャのルールに準じ、ビニールテープとゴルフのウッドティーを用いて12m×6mのボッチャのコート（2mのスローイングボックスとターゲットエリアからなる。ジャックボール無効エリアは省略した）を簡易的に設営した。

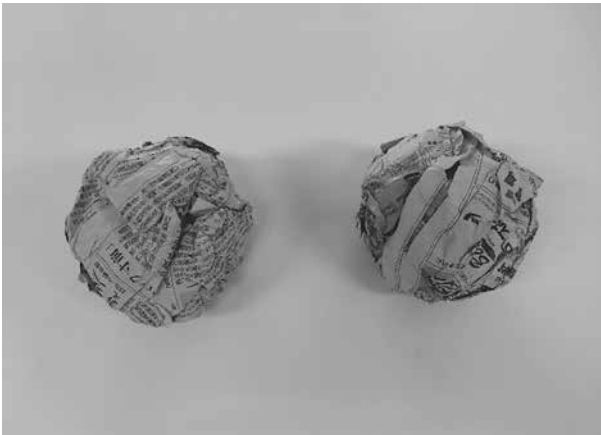


図1 新聞紙を丸めたもの

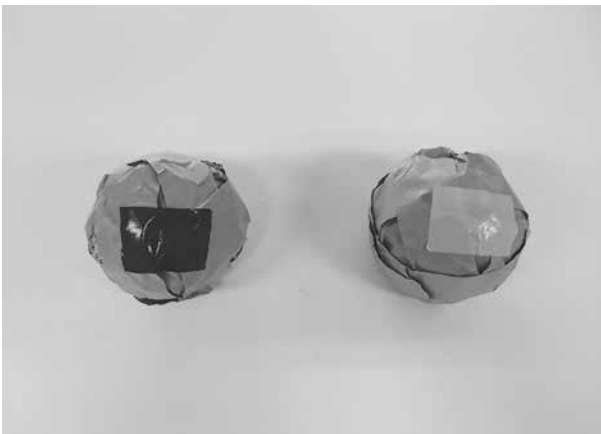


図2 コーティング後の球



図3 ダンボール製のランプ（勾配具）

③ルール説明と実践例紹介（約10分）：ボッチャの基本的なルール（ジャックボールと呼ばれる目標球にいかにより自球を近づけるかを競う）と、園や学校での実践例（障害理解教育、レクリエーション等）を簡潔に紹介した。

④試技（ルール理解促進、約15分）：2チームに出てもらい、1ゲームの予備戦を実施。教員が解説を加えながら進行し、ルールの理解を深めた。

⑤リーグ戦（約30分）：2つのリーグ（各3チーム）を編成し、総当たりでゲームを実施した。なお、ボッチャは1ゲームに6投するが、うち1投を必ず、重度の肢体不自由のある者の立場から、投擲することを求めた。具体的には、着席や腕を動かさず、介助をつけランプを用いての投擲や、割り箸を口にくわえての投擲をした。実践中は、学生間の相互作用や工夫を観察した。

⑥振り返りと発表（約10分）：ゲーム終了後、班ごとに活動の感想、気づき、教育現場での活用可能性などについて話し合い、全体で共有する時間を設けた。

⑦アンケート調査：授業終了後、無記名式の質問紙調査を実施。「楽しかったか」「教育・保育に使えるか」「ルールを理解できたか」「紙で代用しても遊べるか」の4項目について4件法（4：とてもそう思う、3：そう思う、2：あまりそう思わない、1：そう思わない）で回答を求めたほか、自由記述欄を設けて感想や意見を収集した。量的調査については単純集計し、質的調査（自由記述）についてはオープン・コーディングを行った。

3. 結果と考察

3-1. 実践中の観察

実践中の様子を図4、図5に示した。実践中は、以下のような様子が見られた。

まず、なべてディスプレイザブル・ボッチャ活動への没入があり、どのチームにおいても、学生は用具作成からゲーム、片付け（学生からの提案で、授業の後片付けを賭けた熱戦が繰り広げられていたグループもあった）に至るまで意欲的に取り組み、歓声を挙げて盛り上がりを見せていた。実際にあったやりとりの一部を、以下の枠内に引用した。

【道具作成中】

教員：ボールに詰める新聞紙は三枚をおすすめするけど、重くしたければ四枚以上でも良いよ

学生A：ずっしりしてきた

学生B：新聞紙を増やしたほうが安定するけど、丸く作るのが大変になってきますね

（続々とボールが完成するが、見比べると不揃いさが目立ち、皆で盛り上がっている）

学生C：全然それぞれのボールの大きさが違うんだけど、いいんですか？

教員：ボールにも多様性があるっていいのではないかな

学生D：ボールを作りながら、子ども一人ひとりの個性、ボールにも個性って教えられる

学生C：うまいなー

学生A：転がしてみないと何枚がいいのかよくわからない

学生E：なんか、作った人の性格がボールに現れているよね

また、ゲーム中や振り返りの時間に、「どうすればうまく投げられるか」「相手のボールをどう邪魔するか」といった戦略的な会話に加え、「このルール、小さい子には難しいかな」「もっとこうしたら面白いかも」といった教育的な視点からの対話（本質的な対話）が多く生まれていた。

【障害のある者の疑似体験中】

各ゲーム一人が障害のある子ども役となり、肢体不自由の状態を設定してなりきった。他のメンバーが段ボールによるランプを制御し、投擲を補助した。

学生A（肢体不自由の子ども役）：私は手を離すことしかできない

学生B：段ボールからボールが出る瞬間に段ボールを上にはねさせては

学生C：角度をつけないと

学生D（しかし、真下に落下してしまい）コミュニケーションが大切だ…

別の班ではランプをうまく使い、ジャックボールの隣に止めることに成功して盛り上がっている。

学生E：ボールが軽くて思ったところにいかないし、これ（ランプ）使ったほうが狙えるね

学生F：当事者が有利じゃない？

学生G：有利っていうかインクルーシブ。全員ランプを使ってもいいんですよね？

学生H：うーん、話し合い大事だね



図4 実践の様子その1



図5 実践の様子その2

3-2. アンケートの結果

学生から得られたアンケート回答の平均値は以下の通りであった（ $n=46$ ）。「楽しかったか」3.9点、「教育・保育に使えるか」3.9点、「ルールを理解できたか」3.7点、「紙で代用しても遊べるか」3.8点であった。いずれも4点満点あることを踏まれば高得点であった。

自由記述欄には、多様な意見や感想が寄せられた。オープン・コーディングの結果、以下の3つのカテゴリに集約された。

活動の楽しさと特性：

「ボールが個性豊かになることで、思い通りに転がらないこともあり、勝ち負けよりも動きを楽しむというのができてよかった」

「どのゲームも盛り上がって、ボッチャのルールの完成度を実感した」

「自分で道具を作るのでマイボールに愛着がわいて捨てるのが惜しかった」

教材としての利便性・経済性：

「とてもエコな仕組みでお金がなくてもどこでもできそう」

「紙で作られているため、遊んだ後はそのままひとまとめで処分できるのが良い」

教育的示唆・教材研究への刺激：

「すぐに部分案が書けそうで刺激になった」
 「楽しみながら、インクルーシブ、みんなが本当の意味で参加できるとはどういうことか考えられる」
 「障がい理解教育に簡単に活用できる」
 「コートの作り方次第でゲーム性かわるので、新聞紙ボールならコートは小さくするとよいかもしれない」
 「相手チームにボールを作ってあげると面白いかも」

これらの記述からは、手作りボールの不均一性や予測不能な動きが、かえってゲームの面白さを引き出し、勝敗への固執よりもプロセスを楽しむ姿勢を促した可能性が示唆される。また、低コストの点も評価されるととも



図6 分別・処分しやすい状態にして終了

に、インクルーシブな活動のあり方や障害理解について具体的に考えるきっかけとなり、学生自身の教材開発意欲を刺激した様子がうかがえる。一方で、対象とする子どもの発達段階に応じたルール理解やアレンジの必要性についても、具体的な視点が提示された。

4. 総合考察

本実践「デスポッチャ」は、教員養成課程の学生を対象としたアダプテッド・スポーツ実践の試みとして、以下の示唆があった。

第一に、学生の高い満足度と活動への没入が定性的に確認された。また、アンケート結果の平均値や自由記述、授業中の観察から、学生がデスポッチャを楽しみ、意欲的に取り組んでいたことが確認された。

富岡（2021）や真砂・大木（2024）においても対象者がポッチャの活動を楽しみ、経験であったと報告しており、本研究と同様の結果を示している。本研究もまた、

ポッチャ本来のゲームとしての完成度の高さに加え、手作りの用具がもたらす予測不可能な部分や、学生自身が主体的に活動を作り上げるプロセスが、学生の取り組みに寄与したと考えられる。自由記述にあった「勝ち負けよりも動きを楽しむ」という感想は、パラスポーツやアダプテッド・スポーツの本質を捉えたものとなっている。

第二に、教育的効果についても有効であることが示唆された。アンケートの「教育・保育に使えるか」の評価が高かったこと、および自由記述に「すぐに部分案が書けそう」「障がい理解教育に簡単に活用できる」「楽しみながら、インクルーシブ、みんなが本当の意味で参加できるとはどういうことか考えられる」といった具体的な言及が多数見られたことは、学生がデスポッチャを単なるレクリエーションとしてだけでなく、将来の教育実践に繋がる具体的な教材として捉え、その活用法を考える機会となったことが示されている。

中央教育審議会（2021）の『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して－全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現－（答申）』における特別支援教育を担う教師の専門性向上の項目では、「全ての教師に求められる特別支援教育に関する専門性」として、「障害による学習上又は生活上の困難について本人の立場に立って捉え、それに対する必要な支援の内容と一緒に考えていくような経験や態度の育成が求められる。また、こうした経験や態度を、多様な教育的ニーズのある子供がいることを前提とした学級経営・授業づくりに生かしていくことが必要である」と示されている。

本実践のなかでは、重度の肢体不自由のある者の立場として投擲する活動が設定されており、障害による学習上の困難について、本人の立場に立って捉える機会となったことが推察される。また、アンケート結果では「楽しみながら、インクルーシブ、みんなが本当の意味で参加できるとはどういうことか考えられる」との記述が見られ、このことから多様な教育的ニーズのある子どもがいることを前提とした学級経営や授業づくりを考えるための契機となる可能性がある。

また、本研究は重度の肢体不自由のある者の立場を想定しながらの実践であったが、対象とする子どもの発達段階に応じたルール理解やアレンジの必要性を今後の改善点として指摘される。つまり、姿勢の保持や運動・動作に関する肢体不自由の状態だけでなく、ルールを理解するなどの認知面に加えて、言語の受容や表出に関するコミュニケーション面も含めた、重度の肢体不自由のある者を想定して実践する必要があると考えられる。そして、より具体性のある学習上、生活上の困難をイメージできるような工夫が求められる。

例えば、本実践の前段階に、重度の肢体不自由のある者の実態把握をする学習内容を設定することが考えられる。特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（文部科学省、2018）では、実態把握の段階において、自立活動6区分に即して整理することを示しているが、

これを参考にして重度の肢体不自由のある者を想定することも一案である。

さらに、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（文部科学省，2018）で示している、自立活動の個別の指導計画を作成する演習を取り入れた後、本実践に取り組むことも考えられる。自立活動の個別の指導計画を作成する手続きは、実態把握、指導すべき課題の整理、指導目標と具体的な指導内容を設定する流れとなるが、これを挟むことで、自立活動の指導と各教科等との関連を検討することも可能になる。本実践のアンケートの自由記述の結果では、「すぐに部分案が書けそうで刺激になった」との回答もあったことから、自立活動を踏まえた各教科等の指導案を作成することも可能だと考えられる。

第三に、アダプテーション（適合・調整）の思考を促す効果が見られた。手作りの新聞紙ボールは、公式球とは異なり、形状や重さ、転がり方にばらつきがある。この「不完全さ」が、学生に「どうすれば狙ったところに投げられるか」「このボールの特性をどう活かすか」といった試行錯誤を促した。また、自由記述に見られた「コートは小さくするとよいかも」「小さい子ども向けにはアレンジすればよい」といった意見は、用具や環境、対象者に合わせてルールや条件を調整するという、アダプテッド・スポーツの核心にある考え方を学生が自発的に実践し始めたことを示している。加えて、肢体不自由等の障害のある幼児児童生徒の実態に応じて、適切な補助具や補助手段の工夫を考えることは、特別支援教育の重要な指導領域である自立活動の指導と関連するものであり、重要なポイントとなる。

また、大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の効果を検討した研究でも、学生自身がルールや用具を工夫する経験が、障害者イメージの変容やアダプテッド・スポーツへの理解促進に繋がることが報告されている（大山，2017）。そのため、スポーツの標準的なルールを土台としつつ、自分たちでアレンジしてみようという気持ちを喚起し、実践する機会を盛り込むことは欠かせない。

本実践の限界点としては、単一の大学における限られた授業における実践であること、評価が主として、学生の自己評価に基づいていることなどが挙げられる。今後は、より多様な対象や状況での実践、客観的な評価指標の導入、長期的な教育効果の検証などが課題となつてこよう。齊藤ら（2022）も指摘するように、ボッチャのようなアダプテッド・スポーツの体験授業の効果を持続させるためには、単発的な実施ではなく、継続的な授業実践と長期的な視点での効果検証もまた必要であると言える。

引用文献

片岡正教・奥田邦晴（2016）ボッチャー最重度の障がい者アスリートが参加するパラリンピック競技－。日本義肢装具学会，32（4），253－256。

- 細谷一博・五十嵐靖男・三瓶夏希・齋藤征人・村岡舞（2024）特別支援学校小学部と幼稚園における学校間交流の実践的検討。北海道教育大学紀要（教育臨床研究編），76，51－56。
- 大山祐太（2017）大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果。北海道教育大学紀要（教育科学編），67（2），267－276。
- 公益財団法人日本パラリンピック協会日本パラリンピック委員会（2025）国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」教師用ハンドブック第7版。
<https://iam-possible.online/teachingmaterials/img/handbook.pdf>（2025年7月15日閲覧）
- 中安翼．（2022）．性別・技能・言語の壁を越えろ！パラスポーツを活用した体育授業。東書教育賞。
<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/contest/tkyoiku/no38/nakayasu.pdf>（2025年4月28日閲覧）。
- 富岡宏健（2021）小学校体育科におけるボッチャを導入した学習成果に関する実践報告－持続可能性に着目したパラリンピック教育の教材づくり－。アダプテッド・スポーツ科学，19（1），15－24。
- 牛島玲・高山多恵子・原慎右・中山健・納富恵子（2023）バラスポーツ体験を中心活動に位置づけた心のバリアフリーの実践－教材「I'mPOSSIBLE」の活用を通して－。福岡教育大学紀要，72，第4分冊，177－192。
- 齊藤まゆみ・澤江幸則・齊藤仁人・松原豊（2022）．ボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識に及ぼす影響。筑波大学体育系紀要，45，27－33。
- 栗生田博子・押木利英子・鈴木みずほ（2012）体育授業でのボッチャ実施の効果。第47回日本理学療法学会大会抄録集，Ed1472。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/cjpt/2011/0/2011_Ed1472/_pdf/-char/ja。（2025年7月15日閲覧）。
- 洞井秀之・藤田紀昭・金森克浩（2021）生涯スポーツへの展開を見据えた肢体不自由児の体育指導に関する研究－ボッチャの運動習熟と自己効力感の獲得にも注目して－。日本福祉大学スポーツ科学論集，4，1－10。
- 本多克敏・橋本義久・太田令葉・大原健哲・岡真右・住岡優志・丹沢正太・村山希世・大内田裕・岩井俊夫（2022）知的障害特別支援教育におけるボッチャの投球フォームの安定をめざした指導アプローチ。大阪教育大学附属特別支援学校研究紀要，1，49－54。
- 森英則・佐藤慎二（2020）効果的な交流及び共同学習の在り方についての一考察－招く形態の授業実践を通して－。植草学園短期大学紀要，21，71－79。
- 和田誠司（2024）学校教育におけるボッチャの可能性－生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育む教育活動の工夫と生徒指導－。東海学院大学紀要，18，29－36。
- 真砂雄一・大木寛人（2024）アダプテッド・スポーツ体験が保育学生に及ぼす効果。小池学園研究紀要，22，75－81。

佐藤紀子（2018）「アダプテッド・スポーツ」を用いた大学体育授業が初年次学生のライフスキル および自己効力感に与える影響. 総合文化研究. 24, 195 – 219.

中央教育審議会（2021）の「令和の日本型学校教育」の構築を目指して－全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現－（答申）. https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2025年7月15日閲覧）.

文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）.

備考

本実践の経過はキャリア発達支援研究会第10回大会で発表した。